

はじめに

「ゴールデンカムイ」主要キャラクター一覧

「ゴールデンカムイ」のあらすじ

「ゴールデンカムイ」関連地名図

第一章 アイヌの精神文化

I. カムイとアイヌ

カムイとは何か？／カムイの世界と人間の世界／カムイの欲しがるもの／
ホプニレとイオマンテ／良いカムイと悪いカムイ／
病気のカムイ／ゴールデンカムイとトゥムンチカムイ

26

25

24

22

18

4

3



II. アイヌの伝統的風習

入れ墨／求婚の作法／男の挨拶・女の挨拶／
久しぶりに会った時の挨拶／家を訪問する時の作法

65

第二章 コタンの生活風景

チセの作り／囲炉裏（アペオイ）／どこに座るか／
宝壇（イヨイキリ）／どこに物を置くか／チセの壁／
ヌサ（幣柵）とイナウ（木幣）／倉／トイレ

87

第三章 道具たちの織り成す世界

I. 衣服

樹皮衣——アットウシ「厚司」／木綿の着物／アシリパの衣装／

116

115



女の被り物／頭巾（コンチ）／チエプウル「魚皮衣」／文様

II. 道具

食器・調理用具／運搬用具／イテセニ／

シント／煙草入れ／火熾し具／舟／遊び道具

142

III. 祭具

イクパスイと女性の礼装／サパンペと男性の礼装／

シラツキカムイ／花矢／キサラリ「耳長お化け」／ストウ

168

第四章 アイヌの一年

I. アイヌの一年

季節の移り変わり／マタ／パイカラ／

190

189



サク／チユク／暦／アイヌの星座

II. 男の仕事、女の仕事

男の仕事／女の仕事／女の仕事——物語の伝承／
巫者（トウスクル）

218

III. 狩猟の世界

弓と矢／マレク／キテ／クチャとカシ（狩小屋、仮小屋）／
熊／鹿／鮭／シャチ／シマフクロウ／エトウピリカ／メコ

235

IV. 罾のいろいろ

アマツポ／イパブケニ「鹿笛」／アン「鶯猟用の小屋」・カパチリアブ「鉤」／
くくり罾／モユク「エゾタヌキ」と毛よじり／チロンヌブ「キツネ」用の罾／
プラーシカ／テシとラウオマブ

268



V. 採集の世界

トウレブ「オオウバユリ」／プクサ「ギョウジャニンニク」／
ペカンペ「菱の実」／ハツ「ヤマブドウ」とクツチ「コクワ」／
ウクルキナ「タチギボウシ」とスクフキナ「バイケイソウ」／
パラキナ「ミズバショウ」

288

第五章 極寒の地に住む人々

↳ 樺太アイヌとニヴフ、ウイルタ

309

I. 樺太アイヌ

コラム① 樺太アイヌの歴史と文化

北原モコツトウナシ

311

トンコリ「五弦琴」／犬橇

トイチセ「冬の家」とコロポックル／ホホチリ

樺太アイヌの食文化

コケモモ／ムシ／チエトイ



豊原（現在のユジノサハリンスク）／
敷香（現在のポロナイスク）

II. ニヴフ、ウイルタ

コラム② 北方少数民族ニヴフの生活と文化 白石英才

コラム③ 北方少数民族ウイルタの生活と文化 山田祥子

第六章 世界史の中の「ゴールデンカムイ」

和名・小蝶辺明日子／アイヌと文字／

樺太・千島交換条約（一八七五年）／

ウイルクは「アムール川流域の少数民族」だった!？／
キロランケの出自と名前の由来

399

374

358

357



石川啄木とソフィア

第七章 「ゴールデンカムイ」あのシーンの背景

アシリパの村はどこにあったのか？／武器商人・トーマスの正体は？／

「パナンペ・ペナンペ」と「サルカニ合戦」／

アイヌの登場人物たちと名前の由来

アシリパ／インカラマツ／キロランケ／

フチ／チカパシ／エノノカとヘンケ／

キラウシ／オソマの父親／有古イポプテ（力松）／

有古イポプテの家族／リラッテ／樺戸の偽アイヌたち／

モノア／キムシプとリヤブイペ／

金塊を隠した七人のアイヌ／ウイルク

ソフィアの部下たち

コラム⑤ 続・小樽から見た「ゴールデンカムイ」 石川直章

491

第八章 「ゴールデンカムイ」のアイヌ語せりふ解説

517

アチャ「父親」について／フチの祈り言葉／
フチのウパシクマ／キラウシの祈り言葉／樺太方言

おわりに

540

アイヌ文化をさらに知るためのガイド

543

註

547

特別附録 野田サトル先生のブログより一部抜粋

549



「ゴールデンカムイ」主要キャラクター一覧



杉元佐一（すぎもと さいち）

本作の主人公。日露戦争の帰還兵。鬼神の如き戦いぶりとは強靱さから「不死身の杉元」の異名を持つ。北海道に入り砂金を探していたところ、埋蔵金の噂を耳にする。



アシリバ

本作のヒロイン。とある縁で杉元を助け、彼についていくことになる。折に触れてアイヌの文化や生活の知恵を杉元に教授する、よき指南役。



ウイルク（アシリバの父）

幼い頃のアシリバに狩猟を教えたが、殺されたと思われていた。埋蔵金の鍵を握っているらしいが……？



レタラ

絶滅したはずのエゾオオカミの最後の生き残り。アシリバに育てられ、彼女が危機に陥ると駆けつける。



白石由竹（しらいし よしたけ）

通称「脱獄王」。網走監獄の囚人だったが、杉元たちに協力することになり、一行に加わる。



土方歳三（ひしかたとしろう）

元新撰組「鬼の副長」は生きていた！彼もまた、ある目的で埋蔵金を探している。脱獄囚のひとり。



永倉新八（ながくら しんぱち）

元新撰組二番組組長・撃劍師範。小樽で隠居していたが、土方に再会し、行動をともにすることに。



牛山辰馬（うしやま たつうま）

「不敗の牛山」と呼ばれる無敵の柔道家。好色で、女性がらみのトラブルで網走監獄に収監された。脱獄後は土方歳三に協力する。



ソフィア・ゴールデンハンド

樺太の亜港監獄に幽閉されていた、帝政ロシアの反体制ゲリラ組織の指導者。ウイルクやキロランケと面識がある。



鶴見中尉 (つるみちゅうい)

帝国陸軍第七師団・歩兵第二七聯隊所属の情報将校。名は篤四郎。日露戦争後の処遇に不満を抱き、軍事クーデターによる独立国家樹立を目論み、黄金を探す。



谷垣源次郎

(たにがき げんじろう)
秋田・阿仁マタギの出身。鶴見中尉の小隊に所属していたが重傷を負う。コタン(村)で恩を受けたフチのために、アシリバを無事に連れ戻すことを使命に動く。



尾形百之助

(おがた ひやくのすけ)
鶴見中尉の小隊に所属していた上等兵。鶴見中尉に対して造反を企て、脱走兵となる。凄腕の狙撃手。



鯉登音之進

(こいと おとのしん)
鶴見中尉の小隊に所属する少尉。薩摩出身で古流剣術・自顕流の使い手。鶴見中尉を崇拜している。



月島基 (つきしま はじめ)

鶴見中尉の小隊に所属する軍曹。真面目な苦勞人。時には冷酷に、鶴見中尉の命令を忠実に遂行する。



二階堂浩平

(にかいどう こうへい)
鶴見中尉の小隊に所属する一等卒。双子の兄弟である



◆アシリバのコタン(村)の人々
フチ (アシリバの祖母)

母を早くに亡くし、父をも失ったアシリバの身近にいる唯一の肉親。育ての親でもある。



チカバシ

みなしごの少年。コタンに滞在した谷垣に懐き、彼に同行して樺太に渡ること。



オソマ、オソマの父母

アシリバの従妹、母方の叔父・叔母にあたる。

洋平を殺した杉元に対して、恨みを抱いている。

◆その他のアイヌの登場人物たち



リラツテ (アシリバの母)

夫であるウイルクによると、「明るくて晴れの日みたいなの」と。アシリバを産んで間もなく病没した。



キロランケ

日露戦争帰りの元工兵。火薬の扱いや馬術に秀でる。ウイルクと面識があった。もともとはアイヌではなく、大陸のアムール川流域の出身だというのが……？



インカラマツ

不思議な力を持った、謎多き妙齢の女性。杉元たちの前にたびたび現れては、占いで彼らを翻弄する。



キラウシ

杉元ら一行が立ち寄った、釧路付近のコタンに住む男性。後に土方歳三たちに協力することに。



イボプテ

(有古力松 ありこりきまつ)
第七師団に属する、登別近辺のアイヌ出身の一等卒。日露戦争を生き延びた軍人。有古力松は和名。



イボプテの父 シロマクル、
母 (イカリボボ)

父のシロマクルはすでに亡くなっている。彼は金塊を隠した七人のアイヌのうちの一ひとりだというのが……？



樺戸近辺のアイヌたち？

網走に向かう道中で杉元らが立ち寄ったコタンの人々。



モノア

樺戸近郊のコタンに住む女性。杉元らに助けを求める。



キムシブ

かつてアイヌが集めた黄金の隠し場所を知る老人。疔瘡で死んだと思われていたが、実は生きていた。



埋蔵金を探し求めていたアイヌたち

和人に対抗しようと考え、各地から集まった男たち。ウイルクのもとで黄金探しに奔走した。

しかし、挙動の端々に怪しい点がある……。

◆樺太のアイヌたち

エノノカ、

ヘンケ（おじいちゃん）

樺太で杉元ら一行が出会った少女とその祖父。犬櫛を貸し出すなど、さまざまな形で彼らの旅に貢献した。



◆その他の登場人物たち

門倉看守部長

（かどくらかんしゅぶちよう）

網走監獄の看守部長。名は利運。凶運の持ち主。勤勞意欲が低く、不真面目な態度だが、その正体は……？



犬童四郎助

（いぬどう しろうすけ）

網走監獄を統括する典獄。厳格で潔癖な規律の鬼。とある理由から、土方歳三に恨みを抱いている。



江渡貝弥作（えどがいがい やさむ）

剝製職人。鶴見中尉の依頼で、とあるものを製作。それが原因で黄金争奪戦が混乱に陥っていく。

エディー・ダン

アメリカ人牧場経営者。不死身の「モンスター」に牧場を荒らされ、杉元たちに解決を依頼する。



ヴァシリ・バヴリチェンコ

ロシア帝国の樺太国境守備隊に所属していた狙撃手。皇帝を暗殺したキロランケらを待ち構えていた。



稲葉勝太郎、ジュレール

活動写真の興行主とフランス人撮影技師。北方のさま



さまざまな習俗を記録している。樺太で杉元たちと出会い、北海道で撮影したアイヌの映像を見せる。

◆入れ墨の暗号を彫られた脱獄囚たち

後藤竹千代（ごとう たけちよ）

笠原勤次郎（かさらはら かんじろう）

二瓶鉄造（にへい てつぞう）

辺見和雄（へんみ かずお）

家永力ノ（いえなが かの）

姉畑支通（あねはた したん）

鈴川聖弘（すずかわ きよひろ）

都丹庵士（とに あんじ）

土井新蔵（どい しんぞう）

松田平太（まつだ へいた）



*この他にも数多くの魅力的なキャラクターが登場しますが、紙幅の都合により、ここでは本書に登場するキャラクターを中心に紹介し、それ以外は割愛しております。ご了承ください。

「ゴールデンカムイ」のあらすじ

舞台は明治末期、日露戦争（一九〇四—一九〇五年）直後の北海道。「不死身の杉元」の異名を持つ帰還兵・杉元佐一は、ある願いを叶えるために北海道へ入り、一攫千金を夢見て砂金採りに明け暮れていた。そうしたさなか、彼はとある中年の男から「埋蔵金伝説」を聞かされる。いわく、和人（日本のマジョリティ）に対抗するためにアイヌが軍資金として貯めていた莫大な量の砂金を、ひとりの男が奪い取って隠し、その男はやがて網走監獄に収監されたのだという。彼は同房になった囚人たちの体に埋蔵金のありかを記した暗号を彫り、脱獄させたい。逃げ出した囚人たちを探し出し、暗号を集めていけば埋蔵金が得られるというわけだ。与太話だと思っていた杉元だが、直後に起こった出来事により、話は急速に真実味を帯びていく。

その後、ヒグマに襲われ窮地に陥っていた杉元を、行きあわせたアイヌの少女・アシリパが救う。アシリパは父の仇を探していたが、父を殺した男と埋蔵金伝説が関わっていることを知り、杉元に協力することを約束。彼にアイヌの文化や知恵を教えながら、行動をともにしていく。その後、暗号が彫られた囚人のひとりである「脱獄王」白石由竹や、アシリパの父と面識があるというキロランケらも仲間に加わることになる。埋蔵金を隠した

男に会うため、道中で脱獄囚たちの暗号を探し集めながら網走監獄へと向かう杉元ら一行だったが、実は埋蔵金の隠し場所を追っていたのは彼らだけではなかった。

「陸軍最強」と謳うたわれた北海道第七師団に所属する鶴見中尉つるみちゆういは、日露戦争で勝利に大きく貢献しながらも報われなかった仲間たちのため、武力による独立国家の樹立ぼしんを目論んでおり、その軍資金とすべく埋蔵金を探していた。また脱獄囚の中には、戊辰戦争ぼしん（一八六八―一六九年）で死んだはずの元新撰組「鬼の副長」土方歳三ひじかたとしぞうもおり、彼はかつての盟友・永

倉新八くらしんぱちや、鶴見中尉の元から脱走した第七師団の狙撃兵・尾形百之助おがたひやくのすけらを仲間
に引き入れ、黄金争奪戦に参入する。

はたして杉元たちは無事に黄金を手に入れることができるのか？ 冒険あり、バトルあり、歴史浪漫ろまんあり、狩猟・グルメあり。北海道のみならず、樺太までも舞台に展開する「一攫千金サバイバル」の行方ゆくえはいかに!?



第一章 アイヌの精神文化

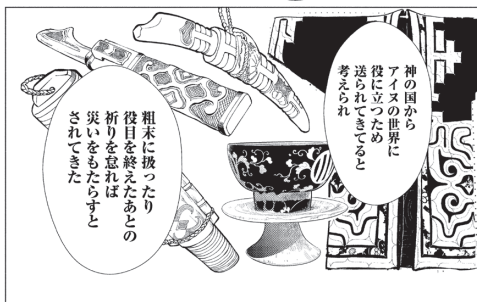
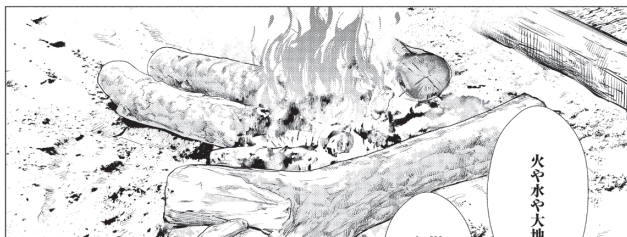


I. カムイとアイヌ

カムイとは何か？

「ゴールデンカムイ」によって、今までアイヌ文化に関心がなかった人たちにも広く知られるようになったのが、「カムイ」というこの言葉です。カムイはアイヌ文化を理解するためのキーワードであり、この言葉の意味を理解していないとアイヌ文化全体がわかりません。なおかつ、「ゴールデンカムイ」という物語が終焉しゆうえんを迎えるにあたって、カムイという言葉がこの作品全体を貫くテーマそのものに直結していることが明らかとなりました。というわけで、前著『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』でも第一章でカムイについて解説していますが、本書でもこの言葉の説明から始めることにしたいと思います。

二巻一二話でアシリパは「私たちは身の回りの役立つもの、力の及ばないもの、すべてをカムイ（神）として敬い、感謝の儀礼を通して良い関係を保ってきた」と杉元に説明しています。また一一巻一〇九話では「人間も含め全ての者はカムイと呼ぶことができる。しかしいつもカムイと呼ぶ者は限られている。人間ができない事、役立つものや災厄をもたらすものなどがカムイと呼ばれる」と言っています。この彼女の言葉を少し解説しまし

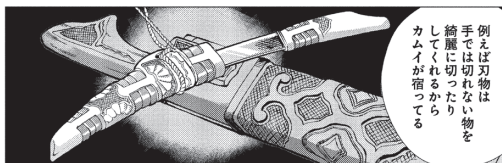


2巻12話より

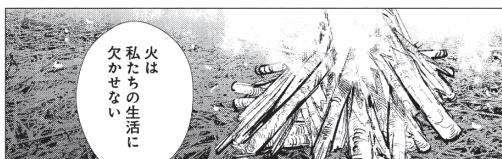
よう。

伝統的なアイヌの世界観では、世界のあらゆるものにはラマツ「魂、靈魂」があると考
えられています。その中でも精神・意志を持つて何らかの活動をしていると感じられるも
のを、特にカムイと呼びます。カムイと呼ばれるものと呼ばれないものの境目は、人によ
つても地域によつても変わります。アシリパが「全ての者はカムイと呼ぶことができる」
と言うのはこのことを言っているので、「意志を持つて活動している」と感じられれば、
普通はカムイと呼ばれないようなものでもカムイになり得ます。「人間も含め」というの
は、人間が死ぬとカムイになるという考え方もあるからです。またカムイという言葉は一
種の尊称としても使われるので、生きている人でも敬意をこめてカムイと呼ぶことがあり
ます。でも、それはやはり日常で生活している一般の人々とは区別した言い方なので、本
質的にはアイヌ「人間」とカムイは別の存在です。そして、人間の力が及ばないようなこ
とができるものほど、格の高い、えらいカムイだと考えられてきました。

カムイと考えられる条件である「活動している」というのは、現代の私たちが考えるよ
りずっと幅の広いとらえ方です。二巻一二話でアシリパは「火や水や大地、樹木や動物や
自然現象、服や食器などの道具にもすべてカムイがいて、神の国からアイヌの世界に役に
立つため送られてきてると考えられ」と言っています。火は熱や光を発し、人間にぬくも



例えば刃物は
手では切れない物を
綺麗に切ったり
してくれるから
カムイが宿ってる



火は
私たちの生活に
欠かせない



でも決して
人間よりも
ものすごく
偉い存在では
なくて

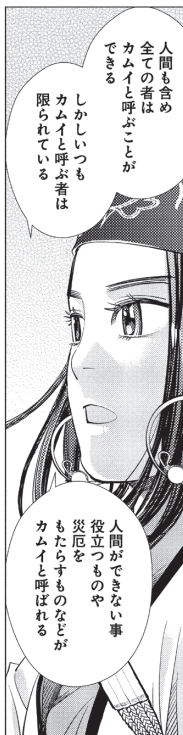
私たちと
対等と
考えてる



天候や
疫病などは
人間のちからが
及ばないから
カムイだ



木も
山に座ってる
カムイ



人間も含め
全ての者は
カムイと呼ぶことが
できる

しかしいつも
カムイと呼ぶ者は
限られている

人間ができない事
役立つものや
災厄を
もたらすものなどが
カムイと呼ばれる

11巻109話より

りを与え、暗い夜を明るくしてくれます。そしてそのままでは食べられない食材をおいしい料理に変えてくれます。それが火の活動であり、そのために人間は家を建てると、「カムイの世界」からわざわざ火のカムイを招いて、自分の家の囲炉裏の中に来てもらうのです。

家や舟や臼や杵や鍋など、人の手で作って使っている道具類もみなカムイです。一一巻一〇九話では「刃物は手では切れない物を綺麗に切ったりしてくれるからカムイが宿つて」と説明しています。人間が刃物を使って切るのではなく、刃物が人間にない能力を発揮して人間を手伝ってくれるからこそ、ものが切れるのだと考えるわけです。このように人間のできないことをしてくれるものは、魂を持つすべてのものの中でも、特にカムイと考えられやすいものです。

家は人間を雨風から守ってくれますし、臼は杵と協力して穀物を脱穀したり粉にしたりしてくれる力を持っています。だからカムイであり、昔の人たちはそれらを人間と同じように精神を持ったものとして扱いました。家の屋根が飛びそうになるほど強い大風が吹く時には、臼を紐で縛つて家の梁から吊り下げ、少量の穀物を臼に入れて搗く真似をしながら、こんな言葉を唱えます。

家の奥さん、気をつけなさい！ 自分を守りなさい！ 白の奥さん、異変をお知らせしますよ！

「家の奥さん」というと一家の主婦みたいに聞こえるかもしれませんが、これはチセ カッケマツ「家・奥さん」の訳で、家は女性のカムイと考えられており、家に向かって「奥さん」と呼びかけているのです。風に吹き飛ばされないように、自分の身を護るまもるように、家に向かって警告しているわけです。白を梁から吊り下げるのは、昔の家は屋根がただ柱の上に乗せてあるだけです。地震や大風で屋根がずり落ちてしまわないように、重しをかけるためです。白もまた女性のカムイで、白を搗く杵の方は男性のカムイと考えます。穀物を入れて搗くのは白に腹ごしらえをさせているということで、それで白に力をつけて屋根が飛ばないように押さえてくれということをお願いしているわけです。このようにあらゆるものを人間と同じような存在として扱うというのが、アイヌの伝統的な世界観の根底にあるものです。

ただし、カムイとみなす条件として、もうひとつ「精神・意志を持って」活動するということも挙げました。一一巻一〇九話でアシリパは鹿についてこう語っています。「私たちが住む西の方は鹿をカムイ扱といしないけれど、東はあんまり獲とれなかつたから昔から鹿を

大切に送る儀式もする」。ということ、動物であつてもカムイとみなされないものもいました。実は鹿は自分の意志に基づいて活動しているようには見えないので、地域によつてはカムイ扱いされないのです。これについては、少し詳しい説明が必要なので、第四章の「鹿」の項（二四九―二五三頁）でもう一度振り返ることにしましょう。

カムイの世界と人間の世界

カムイは本来「カムイの世界」で暮らしています。これは一か所というわけではなく、熊やキツネなどの山に住む動物であれば人間が足を踏み入れないような山奥にあり、海の動物であれば水平線の彼方、かなた鳥や雷など空を飛ぶものであれば、天界にあると考えられています。さらに、カムイの魂は山奥や海の彼方にある世界からも移動して、最終的にはみんな天界に行くと考えられているという説もあります。

アシリパは二巻一二話で「動物たちは神の国では人間の姿をしていて、私たちの世界へは動物の皮と肉を持って遊びに来ている」と説明しています。このカムイの世界での人間の姿というのは、魂の状態であることを意味しており、カムイの世界ではカムイは人間と同じようにご飯を食べたり、結婚したり、泣いたり笑ったりして暮らしていると考えられています。そして、そこからそれぞれの理由で人間の世界にやって来るのですが、魂のま



2巻12話より

までは人間の眼には見え、人間と交流することができませんから、それぞれ衣装をまとってやって来ます。それが私たちの眼に映る動物や植物、あるいは火や水の姿というわけ
です。

カムイたちはそれぞれに目的があつて人間の世界にやって来ます。そのことが、コミックスのカバー袖にいつも書いてある、カント オロワ ヤク サク ノ アランケブ シ

ネブカ イサム「天から役目なしに降ろされた物はひとつもない」という言葉に集約されています。このヤク「役目」には、実にいろいろなものが含まれます。

シマフクロウは人間の村を守るため、カッコウやツツドリはマスの豊漁・不漁を告げるために、わざわざ天界から人間の世界にやって来ます。樹木は大地に深く根を張って地面を支えていることから、シリコロカムイ「大地を守るカムイ」やシランパカムイ「大地を持つカムイ」とも呼ばれています。そのようにして大地を守ることがヤクのひとつというわけです。

二二巻二一九話には、チャクチャクカムイ「ミソサザイ」という小さな鳥が出てきますが、これは熊が近くにいると、チャクチャクと騒ぎ立てて、そのことを人間に伝えるのだと言われています。同じ小鳥でも、二三巻二二八話にはシマエナガという鳥が登場します。アイヌ語ではウパシチリ「雪の鳥」と呼ばれ、これが群れをなしてやって来ると雪が降ると言われているそうです。というわけで、雪の到来を告げるのが役目ということになります。が、漫画の中でだけがをして杉元に助けられたシマエナガのウパシチちゃんは、雪山の中で道に迷い空腹に負けた杉元（動物を殺すのが嫌い）に、羽をむしって焼かれてしまします。涙ながらにウパシちゃんを食べようとしたところで、アシリパの声が聞こえて杉元が号泣するという場面でしたが、アシリパだったら、人間に食べられるのも彼らのヤクなのだか

ら、感謝してお礼を言えばいいんだと言うかもしれないね。

この「カント オロワ〜」という言葉で重要なことは、現代の私たちが取るに足らないようなものとして、追い払ったり駆除したりするような存在に対しても、かつてのアイヌの人々はそれらがこの世界にいる理由を考えてきたということでしょう。

一二巻一一五話には飛蝗ひこうの話が出てきます。アイヌの習慣やら北海道の自然などに妙に詳しい尾形の解説によると、飛蝗ひこうというのは「洪水やら何やらで条件が重なると」バッタが大発生することで、「移動した

先々では農作物はもちろん、草木は食い尽くされ、家の障子や着物まで食われる」という恐ろしいものです。ここまで行かなくても、バッタというのは昔から農作物を食う「害虫」というのが、和人の見方です。

しかし、カムイが自らの体験を語るという形式の、神謡と呼ばれ



23巻228話より



12巻115話より

る物語の中にはバツタを主人公とするものもあり、そのひとつでは、人間の娘がバツタを粗末に扱ったせいで、その村の作物が全滅するという話になっています。バツタはむしろ畑を見守るカムイであり、それをヤクとして畑にいるのだから、少しぐらい作物をかじったからと言って腹を立てるなということでしょう。一二巻一一五話で、飛蝗に襲われたキラウシは「姉畑支遁あねはたしとんがやった行いを、まだ許さんというのかッ」「あれだ



け丁寧に送ったというのに、俺たちを飢えさせるつもりかッ。カムイたちよ!!」と、

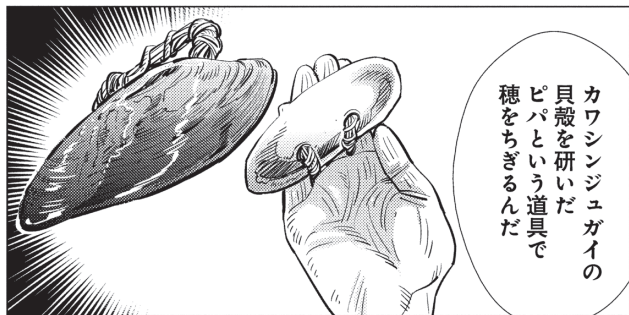
天に向かって叫んでいます。これは、バッタの群れが襲ってくるのを、動物たちに非道なことをした脱獄囚の姉畑支遁への怒りと見ているわけであり、バッタが魔物であると考えられているわけではありません。

知里幸恵の『アイヌ神謡集』には、「沼貝が自ら歌った謡『トヌペカ ランラン』』という話があります。沼が干上がったために「水よ水よ」と、水を求めて泣いていた沼貝を、通りがかったサマユンクルという人の妹が「おかしな沼貝、悪い沼貝」と言って、蹴つ飛ばして踏んづけて行ってしまいます。その後、オキキリムイという人（本当はえらいカムイ）の妹がやって来て、沼貝たちをフキの葉で運んで、きれいな湖に入れてくれます。私たちの素性を知った沼貝は、サマユンクルの粟畑あわばたけを枯らせ、オキキリムイの粟畑をよく実らせたという話なのですが、なんで沼貝が粟の実り具合に関与できるのでしょうか？それは沼貝が何のヤクを持って人間世界にやって来ているのかという話に関係します。

沼貝はカワシンジュガイというのが正式和名で、アイヌ語ではピパと呼びます。けっこう大きな二枚貝で、昔の人たちは鍋の具にして食べました。私も千歳ちとせのアイヌの人たちと

一緒に千歳川にもぐって、川底の砂の中にいるこの貝を足の指ではさんで捕って、焼いて殻が開いたところに醬油しょうゆを垂らして食べたことがあります、大変おいしいものです。このように、食料としての肉を人間にもたらずというのも、沼貝のヤクのひとつなのですが、それに加えて、その貝殻の片方の縁ふちを砥石といしでとぎ、穴をふたつ開けて紐を通して、粟やヒエなどの穂を摘む穂摘み具として使います。一三卷一二五話はフチがこれを使って穂摘みをする場面から始まります（二〇八頁参照）。つまり沼貝は農作物の収穫を手助けしてくれる道具を持って人間世界にやって来てくれているのであり、それも彼らのヤクなのです。だから、沼貝を邪険に扱うと穀物が実らなくなり、食べる物に困るという罰を受けることになるのです。

もつとも、沼貝が泣きながら「水よ水よ」と叫んでいるところのでつくわしたら、私など踏んづけるどこ



13卷125話より

るか、その場から一目散に逃げ出してしまおうと思いますが。

カムイの欲しがるもの

カムイと人間との関係で重要なのは、このカムイとアイヌ「人間」がひとつの社会を作っているという考え方です。人間とカムイはただ同じ空間に共存しているというだけでなく、お互いに必要なものを与え合うことによつて繁栄していくものであり、そのための交流関係を作つていくことが大事なのだという考え方です。人間は動物たちから肉や毛皮をもらい、樹木からは家や舟を作るための木材や衣服を作るための樹皮を、草からは食料や道具の素材となる葉や茎や実や根を、火や水のカムイからは光や熱や水そのものをもらうことによつて、生きることが可能になります。

一一卷一〇九話で、アシリパがそのことをわかりやすく説明しています。

「狩猟というのは人間が獲るんじゃないやなくて、カムイの方から弓矢に当たりに来ると考えられてきた。人間に招待されて肉や毛皮を与えるかわりに、カムイは人間しか作れない酒や煙草たばこやイナウちくへい（木幣）が欲しい」

「私たちはカムイを丁寧に送りかえし、人間の世界はいいところだと他のカムイにも伝えて貰もらわなきゃならない。ひどい扱いをすればそのカムイは下りて来なくなる」



11巻109話より

現代社会に生きる私たちは、ついつい狩りというものを野蛮な行為、人間と動物の戦いと考えがちです。しかし、狩りの代わりに私たちがやっていることは、動物を飼育して屠畜して食べるということであり、動物の命を奪って人間の食料としていることには変わりはありません。しかも、特に日本ではその屠畜という行為について、多くの人が自分とは関係のないところで行われている、自分はあずかり知らぬことだと思つていきます。どうか、普段意識もしていないというのが本当でしょう。そして自分たちに日々の食材をもたらすために働いてくれるその屠畜業の人たちを、あたかも存在しないかのように扱い（たとえば、NHKの朝ドラで漁村や牧場が舞台になった話はあつても、屠畜場が舞台になった話は作られたことがありません）、あまつさえ差別してきた歴史があります。

アイヌはかつて全員が狩猟採集に携わっていた人たちであり、その生活の中で、人間は他者の命を奪うことによつて生きるということを、直接自分の手で体験し、そのことがなぜ許されるのかを考えてきました。その結果到達した考えが、人間に肉や毛皮をもたらしということが動物たちのヤクであり、それに対して人間は相応の返礼をしなければならぬ、つまり、狩りというのは、人間と動物たちとの間で行われる「取引」だという考え方です。

その取引で人間からカムイに贈られるのは、アシリパの言うように「人間しか作れな

い」もの——つまりカムイの世界にはもともとないものということになります。そのひとつがお酒です。お酒はそもそも和人からの輸入品である米と麴こうじを使って造るのであり、自然界には存在しません。それはかつてアイヌ自身にとつても、いつでも飲むことができるわけではなく、お祭りの時にしか飲むことができない貴重なものでした。ましてやカムイの世界にいるカムイたちにとっては、人間が捧さかげてくれない限り口にするのできません。ものであり、そして人間と同じように大好物であると考えられていたのです。

もうひとつ重要なものはイナウ「木幣」です。これは、ヤナギやミズキなどの木を削って作られるもので、これを贈られることをカムイはこのほか喜ぶと考えられています。一二巻一一三話でアシリパが杉元に「カムイはイナウを沢山持っている」と神の国で地位が高まる」「貰ったイナウは金や銀のイナウに変化して財宝になる」と説明し、それを聞いた杉元が「あつちの世界でも金きんには価値があつて、たくさん持つてりや幸せになれるつてわけか」と言う場面があります。確かに、ミズキで作ったイナウは金になり、ヤナギで作ったイナウは銀になるという伝承はありますが、実はこの金や銀になるということ自体はあまり大した意味はありません。一番重要なのは人間の手を経て作られたということなのです。それを持つてゐることは人間に感謝されるようなことをしたという印であり、だからこそたくさん持つていれば持つてゐるほど、それだけカムイとしてふさわしい働きをし



木の削りかけ
であるイナウは
人間からカムイへの
贈り物だ

カムイは
イナウを沢山
持っている
神の國で地位が
高まる

貰ったイナウは
金や銀のイナウに
変化して
財宝になると
いわれている



あっちの世界でも
金には価値があつて

たくさん持つてりゃ
幸せに
なれるつてわけか

12巻113話より

てきた証拠ということで、地位が高まることになります。

ちなみに「地位が高まる」と訳しているのは、アイヌ語のヤイカムイネレという言葉で、直訳すると「自分をカムイにする」となります。つまり「カムイの中のカムイにする」というような意味であり、日本語で言えば「男を上げる」のような言い方が適切かもしれない。もちろん、女性のカムイの場合は「女を上げる」ということになるでしょう。そういうことで、私はこのイナウというのは「財宝」と言っても、宝石や首飾りより、表彰状やトロフィーといったものに近いのではないかと思っています。

そしてカムイが男や女を上げるために、お酒やイナウのような物質的なものより重要なのは、人間からの感謝の祈り言葉です。カムイに祈りの言葉を唱えるのはおにも男の仕事であり、男性であれば誰でもできなければならないことでしたが、それを立派な言い回しでできる人は、パウエトク「雄弁」な人ということで尊敬されたものでした。それはカムイと人間の関係を保つために、言い換えれば人間が生きていくために絶対に必要なことであり、だからこそ、男たちはこのカムイへの祈りを真剣に練習したのでした。このお祈りについては第四章Ⅱ「男の仕事、女の仕事」の項で、もう少し詳しく説明することになります。